朝

織田作之助

アテネ文庫9

弘文堂

始

朝

織田作之助著

アテネ文庫
—9—

弘文堂

朝

一幕

人　物—河・摩耶・瀬木・眞理子・黒部・女中

避暑地　海邊の旅館

その一部分、海を望む小高い所。亭と名附けるにはモダン過ぎる、先づ展望臺風の……とにかく、籐椅子、テーブルなどが並んでゐて（蓄音機も置いてある）樹木が涼しさうな木影を周圍に作つてゐると云つた所。奥には細い道があり、右は旅館の建物へ、左は海邊に通ず。その向ふに海がみえてゐる譯。

夏の朝

摩耶（河の妻二十三）籐椅子にもたれてゐる。ワンピースのドレスに草履。向き合つて黒部（二十五）が立つてゐる。隙の少しも無いのが唯一の隙であると云つた服裝、大學生だが制服でない。

黒部　吃驚りしましたよ、あの時は。あなたと河さんのヨットが海へ出てゐたので、

國立圖書館
昭和 23.5.-1
購入

僕はこゝから望遠鏡で見てたんです。すると、河さんがあなたの身體を海へどぶーんと投げ込まれたんでせう？

摩耶　見てゐる人があつたのね。

黒部　奥さん、海水着を着て、チョコレート喰べてたでせう？

摩耶　あら、御自慢の望遠鏡そんな細かしい所迄見えるのね。

黒部　どぶーん、と投げ込まれたでせう？　はつとしましたね。すると、あなたは素晴しいクロールで泳がれたんでせう？　又驚きましたよ。奥さんがあんなに水泳の達人とは思ひませんでしたね。あのクロールは競泳以上の物凄さですよ……でも、河さん何うしてあんな事なすつたんでせう？

摩耶　丁度風の方向（ムキ）が變つてヨットが一寸も進まなくなつた時よ、あれは。あの人ヨットは下手でせう？（黒部にやつく）いら〳〵して、「ヨットと競爭しないか」つて、あたしの身體を海へどぶん……

黒部　それで、猛烈なクロール……だつたんですね。で、結末は？

摩耶　結末？（考へて）あゝ、そりや、あたしの勝。ヨットは止つた切り。

黒部　僕は又河さんが……河さん無茶をなさるんでせう？

摩耶　さうか知ら？　とにかく、あの人のする事分らないわ（一寸しほれる）

黒部　（元氣に）でも、夕日を浴びて波を切つてる奥さんの姿は綺麗でしたよ、僕はあの時ほんとに……（摩耶の無關心な樣子に氣付いて）……どうも話が飛んぢやいましたね。さつきの話に戻りませんか。

摩耶　あれはあれで、もう分りましたわ。

黒部　お嫌ひですか？　あゝ云ふのを。

摩耶　さうだつたらかうして腰を据ゑてやしないわ。でも聞く方ぢや氣が樂でないから、あゝ云ふお話。

黒部　一番聞いて戴きたい事を聞いて戴けないと云ふのは空虛です。

摩耶　でも聞く丈は聞いたでせう？

黒部　人間は耳だけぢやなく口も持つてゐます。

摩耶　河の事か知ら？　でも、あなたに打ち明ける事つて、あたし、無いのよ。

黒部　とにかく、奥さんが僕をどう思つてらつしやるか、それを僕が聞かしていたゞく番ですよ。

摩耶　むつかしいわね。（茶化して）お眼に掛つたのが一週間前、あたし達がこゝへ來てからですから。法科の方で。お名前は黒部……（笑ふ）

黒部　意地悪い。親のつけた名は吉太郎です。

摩耶　さう。吉太郎さん、この宿屋で一番の早起き。それからダンスがお上手、あ、それから何時も良い香を漂せてらつしやる。

黒部　（ポケットから香水の瓶を取り出す）この香水です。名前はウビガンです。何でしたらプレゼントさして下さい。

摩耶　（黒部が渡すのを受とり）まあ、いゝ香ね、（胸の邊りにつけて）男の方から物をいたゞいたりしたのはもう昔の事よ。有難う。（かへす）それから、ヨットの名人。

黒部　（苦笑）寫眞もやるんですよ。今フイルムを切らしてゐるんですが。……それから？

摩耶　（ぼんやりしてたので）それからつて？

黒部　僕を何う思つてらつしやるか、未だ續きはあるんでせう？　成るべく脇道へそれない様に。

摩耶　探したら良い所澤山あるわ。神經質ぢやない。おほまかで、言葉に針が無い。先づ、あなただつたら……でも、男の方のいゝのは結婚するまでね……でも……

黒部　ぢや、河さんはどちらですか？

摩耶　未だ〳〵寢てゐる人の事は云ひつこなし。

黒部　全く目下の問題とは河さんの事ぢやなかつた、あなたが僕を何う……

摩耶　その事なら、河の事大いに問題になるわ。

黒部　それは奥さんが卑怯だから。

摩耶　と云ふ事になるの？

黒部　河さんの奥さんであると云ふ事に囚はれ過ぎてると思ひますね。

摩耶　それどころぢやない。もう少しで、あたし河の事を忘れてしまふ所だつた。口説くのがお上手だから。

黒部　とおつしやつても、奥さんは河さんがたまらないんでせう？

摩耶　そんな事云つた覺えないわ。

黒部　おつしやらなかつたかも知れませんが、僕は何だか奥さんが……

摩耶　同情だつたら、あたし、こりこりよ。

黒部　人生勇敢になる可きです。

摩耶　勇敢になる爲には？（黒部一寸まごつく）あたしがあなたの戀人に？　いやだわ。

黒部　本當に？

摩耶　物事をはつきりさせると、味もそつけもなくなるけど、あなたが、勇敢にはつき

りおつしやるから、あたしも致方なくはつきりさせるわ。……本當に。

黒部　どうしてですか？

摩耶　そんな事云へないわ。

黒部　躊躇なすつてるんぢやないですか。第一、奥さんは河さんと……

摩耶　（遮つて）あたしが躊躇してるつて？　まあ、自信がお強いのね。……あたし、どうやらあなたの前でいつも嬉しさうな顔して來たらしいわね。

黒部　（摩耶の手を取る）奥さんは僕が嫌ひですか？

摩耶　自分の妻が他の男と話しするのを嫌ふ夫の氣持つてよく分るわ。すぐこんな事になるんだもの。手をはなして下さらない。（立上る。黒部手をはなす）

黒部　今日は奥さんはどうかしてられますよ。

摩耶　明日はもつとどうかしてる積りよ。こんな話なさらなかつたら、もつと愉快だつたのに。

河（二十八）右手道に現れ立上る。和服。兩人氣付かない。

摩耶　少し風が出て來たわ。（何氣なく、河の居る方へ振り向くが、河はもう姿を消してゐる）

黒部　逃げるんですね、僕から。

摩耶　無理矢理にあたしがあなたを好いてると、さうしたいんですの？　あたし河の妻よ。

河の聲、「摩耶!!」と呼んでゐるのが聞える。何となく氣まづい空氣。

摩耶　ここよ！

河再び現れ近寄る。

摩耶　もう起きたの？

河　うん、こゝだと思つた。

黒部　お早う、今日は早いぢやありませんか。

河　でも、勿論、君達より遲いですが。

摩耶　寢坊助だから。

河　だから、早く起きると、人を驚かす。でも、たまには早く起してくれ。早朝の空氣も惡くない。

摩耶　さうね。

黒部　さうですよ、全く。

河　（黒部の方に視線をぢつと向ける。之は河の癖である。黒部どぎまぎし河の顏をみて愛想笑ひをする。河横を向いてあくびの眞似）結構ですね。

黒部　はあ？

河　い〻お天氣で。

黒部　さうですね、こゝは何うして雨が少いんでせう。

河　氣壓の關係でせう。（腰を下す）

摩耶　瀬木さん、今夜でせう？

河　夜の船で來る。分つてるぢやないか。

黒部　お友達なんですか？

河　（摩耶に）聞かなくつても分つてる事を。

摩耶　妙な人。一寸聞いてみた丈。

河　そりやさうだね。（黒部に）何でした？

黒部　お友達ですか、瀬木さんて。

河　え〻。そいつが來ると海が賑かになりますよ。愉快で元氣な男です。

黒部　さうして内面では淋しいんでせう？

摩耶　賑やかな人は案外淋しがりやね。

河　（黒部に）どうしてですか？

黒部　あなたのお友達だから、さう云ふ風に……それに奥さんのおつしやつた樣に朗

河　かな人は……

黒部　さう云ふ考へ方が流行つてるんですか。元氣な奴ですよ。（煙草をつける）木の

河　奴、一本のマッチで煙草がついたためしがない。

黒部　こゝにありますよ。（行きかける）

河　ありがたう。でも……

摩耶　さう、ホープでしたね、あなたは。（黒部去る）（間）ヨットに乘らないか。少

河　し風が出て來たね。

摩耶　（腰を下し）御免だわ。下手だから危くつて……

河　（立上る）逃げるんですか。……くだらない。

摩耶　何よ、妙な顏して。

河　之で普通の顏の積りだが、妙にみえるんだらう。

摩耶　分らないわ。

河　立聽きしたかつたけど、止した。どんな風に口說れた？

摩耶　又始つたのね。

河　ぢや、止しておかう。（間）

摩耶　何故そんな事きくの？

河　何故つて？　勿論聞かなくてもいゝ事さ。嫌だつたら云はなくてもいゝ。どうせつまらない事だから。

摩耶　（立上り、河が荒々しく捨てた吹殼を足で踏み消す）さうよ、……聞く耳持たないつて、さう云つてやつた。

河　僕の饒舌る事よりはずつと面白いだらうに。

摩耶　あたしには、誠ちやんてものがあるわ、つてさう云つたのよ。（河に寄りそふ）抱いてくれないの？　いやだ、黒部さんなんか。

河　はい。（申し譯に抱く）それが本當なら、黒部君は口說き方が下手だつたんだね。

摩耶　（機嫌よく）あんたよりはね。

河　（勘高く）もつと、上手な奴も居つた筈だが。（摩耶を突きはなさうとするが思ひ止つて摩耶の肩をもつて、くるりと身體をまはす）そいつの名は……

摩耶　何云つてるの？　（振り向いて）着物歪んで着てるぢやないの。（背後へまはつて直す）あら、帶もほどけかけてるわ。お馬鹿さんね。そら、よくなつたでせう？

河　何？　怖い顏して、笑顏をしないの？

河　顏の世話まで燒くなよ。

摩耶　ねえ、誠ちやん。

河　僕はもう三十に近い。そんな事云ふな。

摩耶　ぢや、誠坊、墨がついてゐるわ。ほら、鼻の横に。

河　（押へてゐたのが爆發）だが、ホクロはついてゐないよ。

摩耶　又云ひ出したのね。

河　あゝ、又云ひ出した。（默る）　（間）

摩耶　あゝ、早く秋が來るといゝのに。ねえ、部屋の灯を消しても月の光であんたの顏はみえる。虫の音。いゝわねそれに金木犀の香、あたし達、冬、春、夏と送つて來たけど秋は始めてね、ねえ、何默つてるの？

河　默つてる方がいゝと思ふから。

摩耶　意地惡ね。（腰を下す）でも、秋になつたら機嫌よくなるでせう。あたしが、「ねえ、誠坊いゝ香りだわ、」つて云ふと、あんたは、「金木犀だ。うつとりするね、雨が降つたらもつとぷん〳〵香ふよ」つて。

河　僕がそんな事云ふものか。そんな科白は一體誰が君に聞かした？　去年の秋、南が君に云つたその儘の言葉を僕が云ふとでも思ふのか？

摩耶　何を云つてるの？　南がそんな事云やしないわ。
河　ぢや何と云つた？
摩耶　……
河　秋はいゝ時だよ、殊に戀人と別れるには、君が南と別れたのは何時だつたかな。君がそいつと明した最後の晩には、金木犀も月も虫も揃つてゐただらう。
摩耶　何時まで南の事云ふ積りなの？
河　分らないよ。君はさつき僕に抱かれた時の樣な嬉しさうな顏をして、甘えたり、そいつの着物の着方を直してやつたり、
摩耶　そんな事しないわ。
河　何故？　好きでなかつたから？　憎かつたから、それとも好きだつたけど……
摩耶　一體僕は何を云つてるんだ？　どうして返事しない？
河　どう返事したらいゝの？
摩耶　……
河　返事しろつて云つてない。只、何とか云つたらどうだ。
摩耶　何う云ふの？　嫌ひだつたと云ふと、ぢや、偖故交際つたと云ふし、好きだつた

と云ふと、何故あんな奴が好きになつたと云ふし、こんな事あたしの口から云はなくても分り切つてる事だわ。
河　分り切つてる。
摩耶　分り切つてる事をくどくど聞く樣な人ぢやなかつた筈よ。
河　君がどう云ふ風に南を愛し、憎んだかを君の口から聞いて、一體何になる。君の言葉が一體何になる。分り切つてるんだ。（椅子にかける）あの男は、他の女に出す戀文を君に書かせる樣な男だつた。文章が下手と云ふより字が滿足に書けない……君はその女が南に巧く誘惑される樣に、かつて君自身南から聞いた嬉しい言葉の數々をそのまゝ書並べたつて譯だ。
摩耶　そんな恥しい事何の爲に今更云ひ出さなくてはいけないの？
河　その恥しい事を君はどうして僕にしやべつた。
摩耶　そりや……
河　分つてる。僕がさうでないのが嬉しくつて比較したつて譯だらう？　だが、君はついでにあいつの良い所も云つてくれた。
摩耶　その積りはなかつたのよ。
河　只、僕が嫉妬してもつと愛してくれるだらうと思つてだらう？　思ふ壺にはまつ

たよ。僕がかうなつたんだから。……とにかく、君はあんな男なんかどうでもよかつたんだらう？　憎かつた。だから平氣で手紙でも書いてやれた。

摩耶　さうよ。あんな奴何でもなかつた。

河　輕蔑してたんだらう？

摩耶　（反射的に）さうよ。

河　さうして、又、あいつの命令に服する爲に、氣に入る爲に、その手紙を書いたんだ。

摩耶　ひどいわ、それは。

河　君は、もうこんな男と別れなくつちやいけないとつぶやきながら、それでも、あの男に引きづられて行つたんだ。捨てられる迄。

摩耶　あたしをそんな弱い女にして面白いの？

河　ぢや、君があの男を引きづつた？

摩耶　それがお氣に召すのなら。あたしには興味のない事だから、勝手に面白い樣に理窟をこねたらいゝわ。

河　面白いと僕が思つてるとでも云ふのか？

摩耶　あんたはこんな人ぢやなかつたわ。

河　自分でも腹が立つ程變つたと思ふ。それは、しかし……（間）

摩耶　もう止してよ、何をにらんでゐるの？

河　君のにらんでゐる顏を見てゐると、僕はその顏を見てゐると、あの晩の君の顏を想ひ出す。

摩耶　いやになる程いゝ記憶力ね。

河　覺えてゐようと誰が思つた事あるものか。それで、君は忘れた？

摩耶　忘れてゐるとしたら、思ひ出さしてくれるのは何も親切ぢやないわ。第一、忘れるつて何の事をだか分らないわ。

河　あの晩の事、君が南と歩いてゐた晩……今年の四月だ。

摩耶　何時までも……

河　覺えてない、僕の樣にか。

摩耶　一月の事なら覺えてゐるわ。眼にみえる樣に。

河　一月？　君は南とどうしたと云ふんだ。

摩耶　あんたとあたしが始めて旅行した事ぢやないの？（甘えて）いやんなつちやふわ。

河　その事か。

摩耶　誠坊、あたし、お願ひあるの。

河　今頃着物の事云ひ出さなくても、焼き捨てた分は歸つてから買つたらいゝぢやないか？

摩耶　（笑つて）着物の事ぢやないわ。一月の時の話あたしにさせてね。温泉へ行つたのは何時だつたかしら。

河　一月四日だ。

摩耶　（機嫌よく）いゝ記憶力ね、驛で待合せた時、あんたは例によつて五分遲刻、あたしと顔を合せると、ぱつと赧くなつて、どうも寒くつてなんて云つて顔を押へたでせう？　温泉場についた時海の風冷たかつたわね。あの時あたしは、黑のコート、ショールはクリーム色……あんたは狐の襟巻きらひだから……手袋はグリーン、草履は紫の革。

河　（言葉をうけとつて）相手は商人コートに草履、鳥打帽をかぶつて、兩手をポケットにいれてゐる。二人は橋の上をぴつたりと寄りそつて歩いてゐる。僕はおやつと思つた。まさかその女が君だとは思はなかつた。相手の男が南だつたのさ。

摩耶　（ためいきする）どうしても云ふのね。

河　四月だつたけれど未だ川の風は寒かつた。僕は暫く後をつけたけど、直ぐ君達の

前に出て振り向いた。始めて南の顔を見たんだ。只一度丈しかみないけど、鈎鼻の横に大きなホクロのある、眼の小さなどんよりした馬面の……ふん、……

（皮肉な調子が破れる）それでも君は、あれでいゝ男よ、と云つた事のあるその顔を覺えてゐる。

摩耶　あの時は、南とはほんとに運惡く偶然に出會つたんだわ。半年振りよ、話があると云ふし、あたしも、あんたと暮してゐながらあんな奴に物云はれるのはかなはないから、はつきりけじめをつけようと思つて……

河　さうだつたんだつてね。半年振りか何だつたか知らないが、いやその爲だつたか、君はあの晩僕の所へ歸つて來なかつた。

摩耶　何度も云はなくても、分つてるぢやないの？　あの時直ぐあんたの側へ行かうと思つたけど……

河　あいつは破落戸だから、僕に何をするか分りやしないつて云ふんだらう？　僕の腕力を輕蔑したつて譯だ。

摩耶　そんな考へぢやないのよ。

河　（自分の云はうとする事に腹が立つて仕舞ひ）その上、君は僕の面前であいつと自動車にのつて行つて仕舞ふ事によつて、僕の面目をつぶした。

摩耶　だから、翌日あんたの所へ歸つた時、濟まないから別れて呉れと云つたんだわ。

河　何を濟まなかつたの？

摩耶　何をつて……でもあの晩ほんとに何でもなかつたのよ。さうでなかつたらあんたの所へ歸らなかつた筈だわ。あの時は……

河　（遮つて）さうだ。歸つて來た。別れてくれと云ひにね。ところが僕は承知しなかつた。君はその時ほんとに別れたかつたのか。

摩耶　さう云つた丈よ。そう云はなければ歸れない……

河　すると君は……

摩耶　別れられる位ならもつと……

河　とにかく僕は別れる事に承知しなかつた。僕はあの晩自動車に乘つてゐる君達の顏を見た。みまいとしたんだが……君はまるで小羊の樣にあいつの側にしよんぼり坐つてゐた。傲然とかまえた、氣障つぽいそいつの顏はまるで猛獸の樣にみえた。（摩耶何か云はうとする）僕にはとにかくさう見えた。さう云ふ光景をみた事が、君と別れなかつた原因であるかどうか、それは分らないが。（聲が稍〻大きくなる）僕はあいつの鼻の横のホクロ迄覺えてゐるんだ。君も知つてるだらう。あのホクロだつて顏を突き合せてみれば、魅力になつたぢらう。

摩耶　あんたに云はれなくとも、あたし、ほんとに南の事は後悔してるつもりよ。

河　つもりにならなくてもよい。

摩耶　どうしたらいゝの、あたし。（泣聲をまじへて）あたしが後悔してないとでもおつしやるの？　あなたは二日に一度南の事云ひ出すぢやないの？　同じ事許り、まるで蓄音機のレコードの樣に。

河　まるでレコードの樣に繰返へして云つたのは、それぢや君を後悔さす爲だつたのか？「昔、南と交際しなかつたらこんなにくど〳〵云はれなくとも濟んだのに」と云ふ樣な後悔の仕方を僕は强ひてゐたんだ。それとも僕は女が結婚以前に戀人があつたと云つて責めてゐる道學者だつたのか。僕は南の事を始めから知らなかつた譯でもないのに。

摩耶　ぢや、何の爲に云ひ出すの？

河　……

摩耶　あんたの言葉を聞いてると、ノコギリで頭をひかれてゐる樣だわ。（泣く）

河　そして、僕はノコギリの目立て許りしてゐるらしい。少しでも言葉が辛らつになる樣にと。濟まなかつた。君を泣かせたのは僕の言葉の調子だ。謝る。しかし、言葉その儘丈を聞かずに……

摩耶　ぢや、何を聞くの？

河　……だから、僕は默つてる方がいゝと云つたんだ。僕は結局何を云つてたんだらう？　僕は君の言葉尻ばかり追つてゐて、自分の云はうとする事、……云ひたい事……

河、　僕がほんとに云ひたい事とは、云ひたい事は……南の顏が……泪をふいたらどうだ。

摩耶　あたしを苛めて面白い程そんなにあたしが憎いの？

河　（稍〻ふざけて）その反對です。（摩耶の肩に手をかける。摩耶振切る）怒つてる？

摩耶　何時までも怒つてやしないわ！

河　いゝ香させてるね。

摩耶　黑部さんにつけさして貰つたの。ウビガンと云ふ名前ですつて、本當かしら。

河　ふん。

摩耶　何を考へてるの？

河　何も考へてない。考へてる樣にみえた？

摩耶　ほんとに、あなたはくど〳〵怒らなかつたらいゝ人だわ。南は缺點だらけだつたけど、あんたの樣に（はつと口をとぢる）

河　何？（肩が動く）

摩耶　（防ぐ姿勢）

河　なぐつた所で喜ぶ奴は南さ。あいつの傲然たる、寒い風も當らない樣な顏がみえるんだ、そして君の小羊の樣に引きづられて行く姿が。

摩耶　勝手に苦しんでゐるのよ、あんたは。

河　さうだ。そして勝手に同情してる。

摩耶　同情しながら苛めるのね。

河　始めから同情顏もしてないさ、僕は。苛めて許りゐる。

摩耶　ほんとにどうしたらいゝんだか。

河　（笑つて）身の上相談がある。

摩耶　ふざけてるの？

河　そのつもりはない。

摩耶　あの晩の事うたぐつてるのぢやない？

河　馬鹿！　何度も云ふな。一々疑つてゐてどうなる。たとへば君の今の香水だつて疑へば切りがない。僕は君の言を信じてるんだよ。

摩耶　あゝ、もうあんたの皮肉かなはない。

河　皮肉？（荒々しく）さうぢやないんだ。つまり、僕は……

宿の若い女中右手道より登場

女中　あのう、お客様がお見えです。

河　誰？

女中　瀬山さん。いや、瀬川さんとかおつしやる。

河　そいつが來たつて？　夜の船だつたのに、變な奴だな。分つたよ、瀬木だらう？

女中　（頭に手をやつて）あゝ、瀬木さん。

河行きかける。摩耶もつゞく。出合ひ頭に道の所で瀬木に會ふ。瀬木（二十八）河よりもずつと元氣な青年。背廣。女中一禮して去る。

瀬木　やあ、久し振りだね。

河　やあ、半年も會はないね。どうしたんだ？　今頃。

瀬木　寢込みを襲つてやらうと思つてたんだが。

河　今日は不思議に早く眼が覺めた。虫の知らせだらう。

瀬木　奥さん、暫く。

摩耶　お久し振りですわね。賑やかになつてよろしいわ。

瀬木　一本やられた。靜かだね、海は。いゝ景色ぢやないか。君の手紙に僞り無しか。

河　君の手紙には僞りあるよ。迎へに行くんだつたのに。掛けないか。（三人掛ける）

瀬木　突然で驚いたらう？　濟まなかつた。君達そは〳〵してると思つたが。

河　ふん、それで？

瀬木　一船早くしたのはね、連れの都合でね。

河　連れ？

瀬木　（一寸てれて）うん、一人來るのも何とかと思つてね、二人の方が君達の所へ來るにはいゝと思つてね。幸ひ……

摩耶　その方は？

瀬木　直ぐこゝへ來ます。今部屋で顏を直してるんです。

河　女か。相かはらずだ。

瀬木　（笑つて）いや、なに、「海へ行かうと思つてるんだ」と云つたら、「ぢや、あたしも行かうかしら、どうせくしや〳〵してるんだから」つて云ふ樣な事からなんだ。くしや〳〵つて云ふのは、丁度戀人に捨てられた所でね。

摩耶　綺麗な方ですの？

瀬木　それは一寸僕の口から……

河　（瀬木に）物好きだね。慰め役か。

瀬木　何も同情したからつて云ふ譯合ぢやない。慰め役なら奥さんがいゝですよ。

摩耶　どうしてでせう？

河　何故なんだ？　（同時に）

瀬木　そりや、女は女同志ぢやないか。

河　適役かも知れん。

瀬木　所が、その必要もないんだ。當人ひどく朗かなんだ。

河　君の前では、ぢやないのか。

瀬木　さうでもないよ。

摩耶　そんな戀人の事忘れてらつしやるわね。

瀬木　さうですよ。

河　まあ君がいゝんなら。

瀬木　何がいゝんだ。こいつ妙に收つてるね。戀人の事なんか忘れてるどころか、別れてさば〳〵したつて云ふんだよ。そいでなきや僕だつて……と云ふのは、その男がひどい女蕩しでね。話を聞くと、全くお話にならんよ。その癖くだらない男らしい。

河　典型なんだね。澤山ゐるよ、さう云ふのは。

瀬木　とにかく凄いらしい。以前の君のドン・ファン振りなんか全く純情すぎる程だね。その南つて奴に比べると、

河　南？

摩耶　（立上りかける）

瀬木　その男の名前だ。（間）失敬々々。（摩耶に）河君がドン・ファンだなんて云つたのは嘘ですよ。一寸した言葉使ひで、何、一寸僕より女性に騷がれた位ですよ。どうも今日は。

摩耶　（うなだれてゐる）

瀬木　奥さん、ドン・ファンつて云つたのはね、かう云ふ意味ですよ、僕と河君が學生時代に二人並んで歩いてるとしますね。すると向うから女學生が來る。女學生を見る方は僕ですが、女學生から見られる方は何時もこいつですよ。

河　で君は僕の顔に何かついてないかと、ぢろ〳〵僕の顔を見る。もう三度目だ、その作り話は。

瀬木　と、さう云ふ意味ですよ。

河　所で、君はその男を知つてるのか？

瀬木　その男？　あゝ南諸雄か。（河と摩耶視線が合ふ）見た事はないがね。

眞理子（二十三）右手道より登場。和服。河、摩耶稍〻動搖する。

瀨木　今、君の事云つてた所だよ。（紹介する）河君、奥さんの摩耶さん、眞理子……女史。（それ〴〵宜しく挨拶する）

摩耶　お疲れでせう？（椅子をすゝめる）

眞理子　恐入ります。（四人掛ける）そんなには疲れなかつたんですけど、でも、一寸も眠れませんでしたので、白粉がつきにくゝて……全くですわね。（見つめる）

摩耶　女中、飲物の瓶とコップを盆にのせて現る。

女中　お待せしました。

眞理子　ありがたう。（瀨木に）氣が利いてるでせう？

瀨木　その通り。奥さん、土產物です。シヤンパンですよ。

摩耶　どうも、ありがたう。

河　シヤンパン？

瀨木　ところが、アルコール抜きさ。眼の色を變へてるね。林檎シヤンパンつて云ふんだ、（この間に眞理子は飲物を注いで皆の前にくばる。女中退場）

眞理子　どうぞ。

河　ありがたう。

摩耶　（默つて頭を下げる）

瀨木　それ〴〵飲む。アルコールを抜いたシヤンパンつて意味ないが、それでも眞理さんによれば、虛ろな味と云ふ事になつてるんだ。

摩耶　つまり、失戀の（と云ひかげて口をとぢる）御馳走樣でした。

河　御飯はもうお濟みですか？

眞理子　えゝ、船で。

摩耶　あたし、お慰め役ですのよ。

眞理子　お慰め？　何でせう？（瀨木の顏をみる）何かおつしやつたんでせう？

瀨木　何しろ、僕は昨夜一寸も寢てないんだ。さつきも河君をドン（煙草が仲々つかない）……下へ行つて睡眠をとるかな。

河　眠くなければ、散步しないか。その邊。

瀨木　うん、步かう。一日中船にのつてると、土の上がなつかしいね。

河　（眞理子に）一寸失禮しますよ。女の方は又女の方同志で。（摩耶に）後から、風呂へ御一緒にはいつたら。（摩耶默つてうなづく）

瀬木　風光明媚だね。綺麗な美しい景色だね。

河　もつと何とか形容があると思ふが。

瀬木笑ふ、二人左手より去る。間。

眞理子　涼しいですのね。

摩耶　朝の内はこんななりでは寒い位ですわ。（眞理子意味なく笑ふ）よくお似合ですこと。そのお召物。

眞理子　（袖をつまんで）あら、もう古いんですのよ。去年の夏作つたのですから。

摩耶　お見立て、あの人でせう？

眞理子　あらつ、（笑つて）瀬木さん？　いゝえ。

摩耶　南……さん。聞きましてよ。

眞理子　まあ……。お饒舌りだわ、瀬木さん。あゝ、それで、お慰め役？……困りますわ、あたし。

摩耶　さうなんでせう？　お見立て……

眞理子　（うなづいて）そろ〳〵お慰め役が始まるのですわね

摩耶　（強く）さう云ふ意味ではあり……あたし、慰めるなんて、そんな……

眞理子　さうですのよ。悲しんだり、惱んだりしてませんわ、あたし。（眞面目な表情を

ちらりと見せて）そりや、瀬木さん、何う云ふ風におつしやつたか存じませんけど、あたし、南に捨てられたんぢやなくて……何て云ひますか、つまり……あら嫌だわ、何もかも云つて仕舞ひさうになつた。

摩耶　構ひませんわ、云つて頂戴。

眞理子　そんなに、眞剣なお顔になられると、云へませんわ。（袂を弄ぶ）

摩耶　ほんとに、お似合ひですわ。

眞理子　お上手を……

摩耶　（冷かに）あたしも、それと、同じのを、去年の夏、つくり……見立てゝ貰ひましたのよ。河が燒いて仕舞つてもう無いんですけど。

眞理子　お燒きに？　でもお見立て、河さん？　そいぢや、同じ好みですわね。南と。

摩耶　去年の夏は、あたし、未だ、河を知つてなかつたのです！

眞理子　はあ。

摩耶　それで、……お分り？

眞理子　何だか、よく……

摩耶　（眞理子の側に寄り、耳へ口を寄せる）

眞理子　（不安げに笑つて）内緒事？　何でせう？

摩耶　（唇を嚙みしめ、囁く）

眞理子　おからかひになつちや……そんな事……（笑ひかけるが、摩耶の顔をみると笑へない）……そんな事。

摩耶　ないとおつしやるの？　あたしの云ふ事を……

眞理子　嘘としか思へませんわ。南が、あなたのお着物を見立てたりする筈、ありませんわ、不思議ですわ。

摩耶　あたしだつて、不思議だわ。

眞理子　すると、あなたは南の……

摩耶　何に當るつて……お分りでせう？

眞理子　強ひて分る必要もないかも知れませんわね。

摩耶　すると、あたしの方から申し上げなくつちやいけない譯ですわね。

眞理子　（額に手をあてゝ）先に、おつしやつた、のは、あなた、です、から。

摩耶　機嫌のいゝ時は、南は、よく、耳に口を寄せて物を云ひましたでせう？

眞理子　覺えちやゐませんわ。そんな事。（立上る）あなたに、さうしたとおつしやるのでせう？　いゝぢやありませんか！

摩耶　（立上る）あなたは、南を奪つたのよ！

眞理子　とつた？

摩耶　……

眞理子　さう云ふ事になるのか知ら？　あたしの方が後だつた。（間を置いて）あたし、あなたが居る事、知りませんでしたの、……南は、あなたの事は、これつぽちも云はなかつたんですもの。

摩耶　云はなかつたのが、何だとおつしやいますの？

眞理子　（腰を下す）とに角、あたし、あなたの事知つてしたのぢやありませんのよ。だから、とつたなんて、そんな事おつしやると、困るわ。さうぢやなくて、南が、まあ……あなたを……何した、その時あたしが丁度、何だものですから、それでまあ……南とあたしが何……と、かう云ふ事になるんぢやありません？（返事を待つてるが摩耶答へず）……憎まれるのは、あたし、致方ないと思ひますわ。とにかく濟みませんでした、許して下さいね。

摩耶　（腰を下して）憎むと云ふ譯では……

眞理子　南はあたしを好いてゐた。あたしも嫌ひでなかつた、只それ丈、と思つてゐたのですから、……

摩耶　南があなたを好いてゐた……とまあ假りにさうして置いて……とにかく、南が

あなたと……

眞理子　かうでせう？　分りますわ、それが積だ！　さうでせう？　だから、あたし謝りますわ。しかし、さうするとあたしの方だつて、と云ふ事になりません？

摩耶　あなたの云ひ分がありますの？　あきれた！

眞理子　無理に云ひますとね。む・り・に・云・ふ・の・で・なくとも……でも止しませう！

摩耶　云へる事でしたら、おつしやればいゝわ！　おかしくなければ……

眞理子　一人の男、二人の女、かう云ふ場合には、二人とも云ひ分があるものぢやありません？　勿論、あたしの樣に、とつたと云ふ樣な結果になつた方が、何とか云ふのはおかしいわね。でも、やつぱり、も一人の女の方を、平氣ではみてられないと云ふのが當り前だわ。……でも、あたしは先づ平氣よ、南なんか好いてませんから……かうして、あなたをみてゝも何ともないわ。

摩耶　（低く）あたしだつて……

眞理子　それでいゝのね。あたし達喧嘩する必要ありませんわ、南の樣な男の事で。

摩耶　（皮肉とも何ともつかず）理窟は通つてるわね、あなたのお話。

眞理子　二人の話、河さんがお聞きになつたら、河さん、お氣の毒だわ。だから……

摩耶　河の事云はないで頂戴。あたしが、南を好いてるとでもおつしやるの？

眞理子　さうとられたら、馬鹿らしいぢやありません？

摩耶　河は立聞きなんかしませんわ。

眞理子　いゝ人らしいですわね。南なんか、ほんとに……（間）ねえ、あたし、あんな男と別れて本當によかつたと思つてるんですの。別れたい〳〵と思つてゝも、あたしからさうする事も出來なかつたでせう？……だつて（一寸顏を赤くする）だから、南があたしに近寄らなくなつた時、ほつとして、氣持がさば〳〵しましてよ。あの儘だつたら、あたし、すつかり墮落ですわ。

摩耶　墮落？

眞理子　あんな男に、精神的な愛を感ずる事は出來ないぢやありませんか。あの男は只……（赧くなる）……それだのに、あたし、どうしてあんな男に……女ですもの……ね。

摩耶　あたしを侮辱なさるの？

眞理子　あらつ、どうして？……あたし自分が南なんかを想つてるのは間違つてると云ふ事を云つた丈ですわ。

あなたがあたしと同じだとは云ひませんわ。

摩耶　云はないけど、思つて……（聲が出ない）（間）

眞理子　自分の氣附かない内に、誰かを不幸にしてると云ふ事があるわ。あたしもさうなんですわ。濟みませんでした。

摩耶　あたし、南と別れた事、不幸ぢやないわ！

黒部、右手より登場。寫眞機をもつてゐる。

黒部　フイルム屈きましたよ、撮らして下さいませんか。

摩耶　……

眞理子　（何か云はうとする）

摩耶　（それを遮る樣にして）御免だわ。

眞理子　撮つて貰ひませうよ。二人並んでうつゝてゐるのを南に送つてやつたら面白いわ。

摩耶　（立上る）何ですつて？（既に黒部は、シャツターを切つてゐる）

黒部　有難う。一寸動きましたね。

摩耶　（黒部に）誰が、撮つてもいゝと云ひまして？

黒部　何も、そんなに……今日は、奥さんどうかしてますよ。怖い顔にうつゝてますよ。

摩耶　それぢや、之が僕の戀人の寫眞だなんてふれまはらない樣にして下さいね。

黒部　片身離さず持つてたつて構はないでせう？（眞理子に）黒部です。どうかよろしく。

眞理子　よろしく。勿論あたしもうつゝてるでせうね。

摩耶　（眞理子に）寫眞送つてどうなさる積り？

眞理子　（劍幕におされて）只、南が、どんな顔するか、それが……

摩耶　面白い？　いゝ趣味ですわ。あたしそんな趣味の引合ひに出されたくありませんわ。

眞理子　御免ね。さう、くだらない事だわ、こんな事。第一、あたし、南の事なんか忘れて仕舞つてゐるんだから、……

摩耶　それで？

眞理子　あなた一人で想つて……さうぢやない、あなたも南の事なんか何でせう？　だから、あたし達必要もないのにいがみ合つてる譯ですわね。河さんと瀬木さんお友達でせう？

摩耶　あたしは未だ南を想つてる馬鹿な女ね、あなたと違つて、しかも、あたしは、河の妻なんですわね。

眞理子　そんな事おつしやるものぢやないわ。

摩耶　……（がつくり腰を下す）

眞理子　ほんとに、あたし達の話、どうしてこんなになるのか知ら？女の意地からなら、そんなもの捨てちやいませうね。こんな場合、どうしたら一番良いんでせう？顔を合はしたのがいけなかつたですのね。ほんとに運悪く出くはしたものね。でも、南の事だから、外にも澤山こんな事起つてるかも知れない。そんな男の事で、あたし達が……（摩耶と視線が合ふ。眞理子微笑するが、摩耶うなだれる）

間。お互ひに何か云はうとするが、云ひ切れない。

眞理子　つまり、あたし達は、何んな事があるにしろ……どうしたらいゝんでせう？あたしだつて、あなただつて、南の事は……もう、あたし、あなたの前に居つちやいけないんだわ。その方がいゝんだわ、あたしだつて、あなたの後に南の影がみえ出して來る！（立上つて去りかける。摩耶も呆然としてしらず〳〵に立上る。眞理子引つかへして來て）でも、仲良くしませうね。（摩耶言葉なし。眞理子そのまゝ去る）

黒部　（今迄兩人の關心からはなれて、邪魔にならない様に道の方に出てゐたが、近寄つて來て）どうかなすつたんですか？　何か感情の行違ひでも……

摩耶　かまはないで下さらない？

黒部　さつきは失禮しました。氣晴しに一つ踊りませんか？　くしや〳〵した時踊つたら直るつておつしやつたでせう？（レコードをかける）

摩耶　止して頂戴。

黒部　（氣附かれない様に）ちえつ！（レコードを止める）

摩耶　みなみ……の影……が……南の顔……（泪が落ちて來る。眼をこすつて出て行きかける）

黒部　（追ひすがつて）事情は分りませんが、何か相談事でもありましたら……今晩會へないでせうか？

摩耶　（默つて去る）

黒部　（口笛を吹いて歩きまわる）ノック・ダウン。（笑つて）惜しい、今止めるのは。機會をねらつて（ベットを振る眞似）タイムリイヒット！　もう一人の方も綺麗だが。（ボールを投げる眞似）フオアボールで一塁といかんかな南つて何だらう？

瀬木　河、瀬木左手より話しながらはひつて來る。何にしてもね、君のやり方は無茶だよ。

河　うん、しかし……無茶は無茶だが……

瀬木　おや、御婦人達は？

黒部　（河と視線が合ふ）奥さん、今あちらへ行かれた許りです。

河　ありがたう？（瀬木を紹介する）瀬木君です。案外之で淋しがりやでね。

瀬木　冗談云つちや困るよ。笑はせるね。

黒部　黒部です、どうかよろしく。

瀬木　よろしく。お風呂かな。

河　化粧だらう。藝術寫眞でも撮るのかな。

瀬木　何だつて？

黒部　（氣まづくなり場をはなれかける）

河　まさかね。

瀬木　何がさ。

河　黒部さん、あちらへ行かれて、若し會はれましたら、こゝに居るつて云つてくれませんか？

黒部　さう云ひませう。（行きかける）

河　（テーブルの上に置いてある寫眞機をとつて）之は？

黒部　あゝ、ありがたう。（受とつて右手より去る）

瀬木　忠實だね。君いばつてるぞ。

河　僕が苦手なんだよ。摩耶ん所への用事なら喜んで……と云ふのさ。近づきたいんだらう。

瀬木　あゝ云ふ存在は？

河　面白いぢやないか。

瀬木　（腰を下す）掛けるとしようか。

河　（腰を下す）そりや、氣持いゝ事はないよ。だが、女の方ぢや、僕のくしやくした話よりは、あゝ云ふのは惡い氣がしないからね。

瀬木　どうも、君の調子が皮肉だと思つたが。

河　（苦笑して）馬鹿げてると、自分でも思ふよ。何も黒部に皮肉に出なくてもいゝんだが、あゝ云ふのは默殺すればいゝのさ……だが、あの男丈は駄目だ。どうしても默殺出來ない。

瀬木　餘程、その男には癪にさはつてるんだな。變つたよ、君は。

河　僕は、こゝ數ヶ月は何にも手がつけられないんだ。會社に居つても、本を讀んでゐても、人と話しをしてゐても、その男の顏が浮ぶ……もうそれ丈で何にも出

來なくなるんだ。

瀨木　何とかしろよ。あたら男一匹。……人相まで變つたよ。

河　（笑つて）凄いか。

瀨木　優しい事は優しいよ、君の顏は。でも、君がその男が見立てたと云ふ着物を燒いたり、ヨットから摩耶さんを海へ投げたり、摩耶さんを苛めたりしてゐる時は凄いだらうね。

河　僕はその男の顏が浮ぶと、もうまるで何かにとりつかれてるんだ。だが、ぐつと押へてゐる。しかし、何かの言葉のきつかけで、僕はもう苛め出してゐるんだ。

瀨木　とにかく、そんな事ぢやいかんよ。こんな男ぢやなかつた筈だ。君は。（一寸考へて）案外君同情してるんぢやないかな。摩耶さんに。それで、そいつを憎む。

河　あれの方ぢや同情なんかして貰ひたくないだらう。それに僕にしたつて……

瀨木　同情してるとすると、……

河　いや、同情を裝つてるのかな、僕は。

瀨木　そんなに氣になるのかな。

河　一度僕の立場になつてみろ。僕が憎いのは摩耶でも何でもない、只摩耶がその男を愛したと云ふ事實、どう云ふ風に愛したかその光景が眼にみえる樣だ。それが

たまらない。このくしやくした氣持を何處へ持つて行つたらいゝんだ？

瀨木　苛める、あるのみか？

河　君だつたら？

瀨木　僕か、未だ考へてない。しかし何とか方法が……

河　外國ではかう云ふ場合決鬪だね。

瀨木　決鬪？　冗談ぢやないぞ。

河　僕は、夢の中では何度もそいつを殺してゐる。絞殺、匕首を心臟に突きさした事もある。そいつが女と飲んでゐる酒の中に毒をいれた。（自分の言葉に快感を覺え出す）ピストルの時もある。そいつをボートに乘せて沖へ連れ出し、海へ投げこんだ夢もみた。泳げないもんだからそいつは溺れる。斷末魔のそいつの顏はいやだつた。

瀨木　凄いねえ、君は。ねえ、摩耶さんの事何も惡く云ふのではないが、君がそんなに苦しむに値するひとなのか？

河　値打？　それは問題ぢやない。僕がその男の事でたまらないと思ひ出した時、それはつまり彼女がどうであらうと、僕が彼女を愛してると云ふのに間違ひないんだから。逆に、愛してる限り、以前の戀人の事はたまらないと云ふ事になる。

瀬木　すると、戀人のあつた女を愛するのは危險だと云ふんだね。

河　さう云ふ意味ぢやないが。

瀬木　忘れると云ふ事もあるぢやないか。忘れろよ、その男の事は。忘れられない譯はないんだらう？　忘れると云ふ事は、人間の持つ最大の智慧だと君は云つた事がある。獨逸語の試驗の時、僕が單語の分らないのを聞いたが君も知らなかつた。その時君はさう云つた。

河　所があいつの顏を忘れられない、と云ふ事はもう僕の習慣なんだ。

瀬木　何とか、ならんものかね。苛めたりするのはお互ひに苦しむ事になるんだから。

河　勿論、惡い事なんだ。それに之は自業自得なんだ。僕が苦しむのは當り前なんだ。

瀬木　どうしてだ？

河　君も知つてる通り、僕は何人もの女を捨てゝ來た。

瀬木　そりや、事情があつたぢやないか。

河　結果丈を云つてるんだ。捨てゝ來た。その女達が他の男と結婚する。するとその男はどうなる？　若しその男が僕の事を知つたら、どんなに苦しむか？（瀬木何か云はうとする）確に苦しむんだ。しかし、その女達が未だ僕の事を想つてない

とどうして云へる？

瀬木　君の事だ、忘れられまい。

河　女つてそんなものだ。

瀬木　一概に云へんよ。

河　とにかく、僕の事を未だ想つてるとしたらどうなんだ？　僕は人を苦しめる代り、あいつから苦しめられるんだ。自業自得なんだ。

瀬木　さうかな。で、しかも尙……

河　（皮肉をまじへて）だから僕の摩耶に對する態度は非難されても仕方がない。

瀬木　（煙草がうまくつかない）非難なんか、僕は一寸もしてない。非難出來たがらでもない。君こそ僕を非難したいんぢやないだらうか。

河　馬鹿云へ！

瀬木　とにかく、僕は君がこんなに苦しんでゐるのをみるのは辛い。昔の潑溂たる君を見たい。

河　潑溂は君の方に讓るよ。僕はそんなもの一寸も羨しくはないんだ。

瀬木　河誠三の面影さらに無いとは情無い。ねえ、さうぢやないか？　君は僕より元氣だつた。

河　僕は、君だつて羨しいとは思はんよ。

瀬木　僕を？　一寸待つてくれ。それは一體どう云ふ「僕」を指して云つてるんだ。

（考へる）女の事なら、僕は君に倣つて同じ様な事をして來た。尤も僕の方は女から捨てられた場合も二三ある。が、そこ迄は大體君と同じだ。だが、今君はさう云ふ狀態にある。所が、僕は、僕の今の狀態とは……眞理子は男に捨てられた女だ。そして、南は君の所謂前の男の様な奴だらう？

河　うん

瀬木　南つてつまり

（同時に）（河、瀬木と視線が合ふのを恐れる）

瀬木　だから、立場は似てゐる。そこで……

河　だが君は愛してやゐないぢやないか、あの人を。

瀬木　と云ひ切れる譯でもない。さうだらう？

河　（困惑して）すると？

瀬木　勿論、僕は未だ南……眞理子の以前の戀人の事は氣になつてない。すると、君の考へ方では、そんなに好きぢやないと云ふ事になる。今の所ではね。しかし……

河　男が女を獲得するのに無中になつてる時は、そんな事は氣にならないもんだ。

瀬木　次第に氣になつて來る。すると……

河　（考へこむ）

瀬木　僕はこゝでだね。

河　好きなら氣になつてる筈だ。氣になつてない様なそんな戀なら止めたらどうだ。

瀬木　（立上る）

河　（立上る）君だつて始めはさうだつたんだらう？　大きな顏して非難するな。君丈を非難してるんぢやない。只僕は……。

間。

瀬木　靜かな海だね。

河　もう直ぐ賑かになる。船でね。

瀬木　要するに、何だね。

河　何だい？

瀬木　馬鹿〳〵しいぢやないか。

河　何がさ？

瀬木　（笑つて）どうも、僕はさつきから君の話聞いてると變に君の顏が憎くなつたよ。怒るか？

河　（微笑んで）怒るものか。それで何だと云ふんだ。

瀬木　所が、今その譯が分つたよ。つまり、僕は現在の君の樣に成りたくないんだ。考へてみろ、太體僕のする事は何時も君のやつた跡ぢやないか。高等學校へは一緒にはひつた。大學へはいる時は、君はもう大學の二年生だ。卒業したのは君より二年後だ。此處へ來たのも君の後からだ。女と遊ぶのを敎へたのも君だよ。どうも君は僕の水先案内だね。所が、今僕が眞理子とこゝへ來てみると、君は摩耶さんと結婚してこの樣な狀態になつてゐる。所が僕は君の狀態をいゝとは思はない。思ひたいが、思へんよ。

河　いゝものか？　僕の方が痛感してゐる。

瀬木　「そんな戀なら止めて仕舞へ！」と君が云つたのは、君は、僕がさう云ふ狀態にならない樣に……どうも形容がまづいが、暗礁に乘上げない前に僕を引止めたいんだらう？

河　（混亂して）そりや、君はあの女に深入りしない方がいゝと思ふよ。僕はどうしてこんな事しやべつたんだらう。君だつて聞いてゐて面白くなかつただらう。

瀬木　アルコール拔きのシャンパンに醉つて身の上話を始めやがつたと思つてた。

河　さつき僕達波打際に居つたゞらう？　あの時僕は、足元から一尺も離れてない淺

い水の中を、小さな魚が綺麗に並んで泳いでるのを見たんだ。一寸大きな奴が先頭で神妙に列を亂さずに泳いでゐるんだね。僕は魚にやり切れない氣持なんてあるのかと考へた。そして、君にあの男の事を云ひ出したくなつたんだ。僕はかう云ふ生活……摩耶を愛しながら、しかもその摩耶を南の影を通してしかみられない、僕が南から受けた印象を常に想ひ出しながら摩耶と暮して行く、摩耶だつてかはいさうだ……かう云ふ生活を續けて行かなくつちやならないんだ。丁度魚が生きてる限り、あゝして泳いでゐる樣に。だが、魚の表情が僕の眼にどんなに哀しさうに映らうとも、魚には悲しい氣持なんかないんだからね。

瀬木　成べく仲良くやるんだね。

摩耶右手より登場

摩耶　御用ですの？　何か。

河　別に。眞理子さんは？

摩耶　お部屋でせう。

瀬木　又顏を直してるのかな。こゝの海は變に青々としてるね。

河　おい、ヨットでも走らすか。風があるから。

摩耶　あたしも乘らうかしら。

瀬木　ぢや、皆んなで四人。ヨットは大きい？

河　まさか四人位ではひつくりかへるまい。（兩人笑ふが、河の笑ひは直ぐ止む。摩耶に）眞理子さん呼んどいで。

摩耶　えゝ。でもお眠いんぢやない？

眞理子右手より登場。着物がさつきと變つてゐる。

瀬木　成程、眠むさうな顔だ。

眞理子　（道の所で瀬木を呼ぶ）一寸。

瀬木　（近寄る）何だ？（眞理子囁く）我儘だなあ、君は。今來た許りぢやないか。

眞理子　朝の内にも一つ歸りの船があるんですつて。

瀬木　冗談許り云つてやがる（河夫妻の方に間の惡さうな眼を向ける）

眞理子　海よりも山の方がいゝのよ、あたし。

黑部、右手より二人の側を通りかゝる。

黑部　（眞理子に）居られたでせう、こゝに。

眞理子　どうもありがたう。（黑部去る）

瀬木　何？　今のは。

眞理子　あんたが此處に居るつて教へて下すつたの。

瀬木　親切だね。

眞理子　ねえ。（囁く）

瀬木　（顏色變る）とにかく、部屋へ行つて話をしよう。河君、一寸失敬するよ。

眞理子　（稍〻冷かに頭を下げる）

河夫妻　（それに答へる。兩人去る。沈默。）

瀬木　（直ぐ引つかへして來て、河が何か云ふのを待つてゐる。）

河　（言葉を探す）

瀬木　煙草二三本ほしいんだ。（河與へる）ありがたう。そんな顏するなよ。

河　君だつて悲壯な顏だぞ！

二人微笑する。

瀬木　ぢや、一寸失敬するよ。（去る）

河と摩耶視線が合ふ。

摩耶　もうお晝前かしら。

河　未だ〳〵だらう。隨分時間の經つた樣な氣がするが。（獨言の樣に）僕は、今、瀬木に何と云つたらよかつたんだらう？　瀬木には濟まないよ。あんな話するんぢやなかつた。僕は、まるで自分の病氣を人にうつしたい爲に人混みの中にはい

つて行く傳染病患者の樣だつた。僕は意地惡かつたよ。だが何う云ふ譯か、瀨木をみてゐると、氣持が苛々して來たんだ。

摩耶　（多少不安に）何をお話しなすつたの？

河　いろんな話をした。だが、君の以前の戀人の名前は云はなかつた。君が眞理子さんとどんな事を饒舌つたのか知らないが、しかし、瀨木は今あの人からその名前を聞いてゐる筈だと思ふ。あの人がこゝに居たくない氣持は僕によく分る。であの人が歸る理由として、どうしても瀨木に君の事云はなくてはならない。だから、あの人が瀨木に默つてくれるのを望むのは無理だ。だが、君は南の事をあの人に云はなくてもよかつた筈だ。云はなかつたの？

摩耶　（頭を振る）

河　僕は君を眞理子さんと二人切りにして置く前に、君に一言注意して置く可きだつた。僕は、しかし、君があの人の前でどんな態度をするか、と云ふ事ばかしに興味を抱いてゐたんだ。どんな態度を……つまり君が……

摩耶　濟まなかつたわ、あたし。

河　何を濟まないの？

摩耶　何もかも。

河　例へば？

摩耶　あんたが苦しむのはあたしのせゐだわ、あんたを苦しめてゐるのはあたしなんだのに、さつきの樣にあんなに怒つたりなんかして本當にいけなかつたと思ふわ。あんなにあんたを苦しめてゐるつて、ほんとにあたし罪な女だと思ふの。

河　何も之は君の罪であるとは云へない。僕が自分勝手に苦しんでゐる事なのかも知れない。

摩耶　自分勝手に苦しんでゐるなんて、あたしさつき云つたけど、御免ね。氣を惡くしないでね。

河　皮肉のつもりで云つたのぢやないんだよ。

摩耶　あんたが南の事で苦しむのは、無理ないと思ふわ。

河　（一瞬晴やかな表情が浮ぶ）さう云つてくれるのは嬉しいよ、僕は。始めて君から聞く言葉だ。だが、一體どうしてそんな風な考へ方になつたの？

摩耶　あたしだつてそんな事分るわ。只自分が意地つ張りだから、云はなかつた丈だわ。

河　さうだ。誰でも分る事だ。しかし、誰でも……（言葉を探す）誰でも共感する……共感する……事ぢやない。

摩耶　キヤウカン？

河　誰でも味ふ事ではない。君は眞理子さんに會つてその氣持を味つた。そして始めてぼくの氣持が……

さうだらう？

摩耶　何もあの人に會つたからつて、あんたの氣持を……

河　さうだつたら嬉しい。しかし、君はあの人を見た時南を想ひ出したに違ひない。そしてあの人を見る君の眼は僕の妻としての眼ではなくて、南の戀人としての眼だつたに違ひない。そして君が南の事を想つてゐないのだとすれば、あの人は何も歸ると云ひ出さなくてもよかつたに違ひない。君は全然南を忘れてゐると云へるだらうか。

摩耶　そんなに理窟づめに云はれると、あたし自分で自分の氣持が分らなくなつて來るわ。（泣く）

河　僕の理窟なんか力の弱いものだ。だが君はそんなものにおされないで、はつきりと君の氣持を云つてくれ。

摩耶　あたし、もう何にも分らないわ。でも、あんたを愛してる事丈は云へる。

河　（摩耶の側に寄りそつて）僕は又君を泣かした。僕を愛してると今君は云つた。

摩耶　それでいゝんだ。愛してると云ふ氣持がしてゐる丈でいゝんだ。南の事を忘れてゐると只さうゆふ氣持がしてゐる丈でいゝんだ。それ以上の事は誰も分らないんだ。

河　もう怒らないでね、誠坊。あたしどんなにしてでも謝るから。

摩耶　謝る？　何を謝るんだ？　何を。

河　何かしら濟まない樣な氣がするのよ。

間

河　僕だつて澤山の女を知つて來た。（間）だが、さつき瀨木は僕がドン・ファンだつたと云つたが、君はそれを聞いた時堪らないと思つたゞらうか？　君が眞理子さんをみた時に感じた樣に、つまり、君は、南の事で嫉妬した樣に僕の事で嫉妬したゞらうか？

摩耶　あたし今までにあなたが澤山女を知つてる事は薄々感じてゐたわ。瀨木さんがおつしやるまでもなく。

河　僕は、自分を隱すためや、見榮で、それを默つてゐたんぢやない。只君に僕と同じ苦しみをさせて喜ぶ程意地惡くなかつたからなんだ。所がこれは僕の思過しだ。君は苦しんでもゐない。

摩耶　お互ひに昔の事は忘れませうね。

河　忘れられたらね。君と二人で行つた温泉はそれまでに僕が何人もの女と一緒に行つた温泉なんだ。

摩耶　どうしてそんな事云ふの？　嘘だわ。あんたあの温泉の案内を余り知らなかつたぢやないの。

河　君が知つてた程には……ね。

耶摩　もうそんな事云はないで。

河　君はどうして嫉妬しないんだ？

摩耶　あたしが南を知らなかつたのなら、そりや、黙つてないわ、でも、あたしには云へた義理ぢやないし、あたしの愛してゐるのは現在のまゝのあんただから、過去の事なんかどうでもよいの。

河　成程さうとも云へる。おし隠して黙つてゐる事も出來る。さうしなくちやいけない事も、又さうする方がいゝ事も、僕は知つてゐるんだ。君は黙つてゐる、それに僕が云ひ出して君を困らす、つまりエゴイズムなんだ。

摩耶　でも、無理もないんだわ。

河　どうして？　君が南を想つてゐないとしたら、僕が無理な事は當然なんだ。……

……あゝ、僕はどうして黙つて無いんだらう？　黙つてゐる方がいゝんだ。

瀬木登場。摩耶立上る。

瀬木　黙つてゐる方がいゝ、と云ふにしては聲が大き過ぎるね。靜かな海が驚くよ。又まづい形容だ。どうもあきれたよ。

河　何がさ。

瀬木　近代の女性は皆泳げるものとばかし思つてゐたんだ。

河　泳げるやうで泳げないのもあるよ。

瀬木　彼女がそれなんだ。だから、海がいやだと云ふんだ。山へ行きたいつて。泳げないのは恥かしい丈ぢやなくて、海が怖くなるらしい。所が、僕はそれに同情したんだ。

河　こゝへ君を誘つて、本當に濟まなかつた。

瀬木　朝の内にも一つ船があるらしい。

河　だつて、そりや、もう直ぐぢやないか。……（間）……二人とも船にのるんだね。

瀬木　うん。早い方がいゝと思ふ。

河　僕は、無理に引止めたり出來ないが、君一人、こゝに居つたらどうだ、ともう少

しで口に出るところだつた。

瀬木　だが、やはり、二人で來たんだから、二人で歸るよ。本當に、我儘な女性だよ。

河　今の内から、そんなに我儘ぢや困るね。

瀬木　（笑つて）大丈夫だよ。

河　ほんとに濟まなかつた。あんな話をするんぢやなかつた、君に。

瀬木　馬鹿云へ！　君の話聞いたからつて、僕が變るなんて事はないよ。

河　さう云ふ譯ではないんだが、とにかく濟まなかつた。

瀬木　僕は、之で仲々圖太いんだ。危いと知ると、さつと身をかはしてごまかしてしまふんだ。さう云ふずるさをもつてゐる。

河　さう云ふ所をみると、そんなにずるくない。

瀬木　さう君の心配を押しつけるなよ。僕は餘程感情がデリケートぢやない。さつき君の話を聞いてた時の僕と、今の僕と、氣持の上で非常に違ふんだ。

河　さうだ。君には君と云ふものがある。僕の尺度を當てはめて何とか云ふのはいけない、それに僕は云へた柄でもない。

瀬木　うん。（ポケットから寫眞のフイルムを取出して）奥さん、これ、あれが渡してくれつて事でした。奥さんの手で捨てゝ下さいつて。

摩耶　（受とる）濟みません。

河　何？　それ。

瀬木　フイルム。彼女が黒部青年から捲き上げたものらしい。どうも女のする事は分らないね（摩耶に）直ぐ、此處へ挨拶に來る筈です。どうも、來るのも、歸るのも突然で、お氣を悪くなさらないで下さい。

摩耶　（やつと）寂しくなりますわ。

河　稍、永い間。河、瀬木煙草を吹ふ。瀬木は例によつて仲々火がつかない。

瀬木　どうもね。

河　何だ？

瀬木　何でもない。濟まなかつたね。

河　未だ云つてやがる。

瀬木　しやべらなくとも分るつてのは本當だね。

河　しやべつてると、どうしても自分の姿を見失ふ。言葉がもつれる。（時計をみる）

瀬木　何時？

河　船には未だたつぷり三十分ある。

間。

瀬木　よく船や汽車の待合所でね、いざ出發となると急に一時にわーと饒舌り出すけれど、それまでぢつと默つてゐると云ふ事があるね。嵐の前の靜けさ、拙い形容か。

河　あるね。

瀬木　さう云ふ事があるね。

河　うん。

二人笑ひ出す。仕方なしに笑つてゐる。

河　摩耶こらへてゐた泪が一時に押し寄せて、泣き出す。何を泣いてるんだ？（瀬木の顏をみて歪んだ笑顏をする）泣く事はないぢやないか。誰も惡かない。みんなあいつなんだ！

眞理子ハンドバツクを持つて現れるが、この場の樣子をみて靜かに引きかへす。瀬木はそれを見送る。

海は、急に鳴り出したポン〳〵蒸氣や汽船の音で活氣を呈して來る。

幕。

一九三五、十二、四

編輯後記

織田作之助氏は一般には小說家としてだけしられている。しかし實はそれは彼の一面でしかない。他面において彼が戲曲作家であつたということは世間には殆んどしられていない。そのことは作家織田作之助を評價する上において不十分であるばかりでなく、彼の小說そのものを理解する上にも不十分であると思われる。「私の小說は、すくなくともスタイルは、戲曲勉强から逆說的に生れたものであると言へるだらう。私の小說の話術は、戲曲の科白のやりとりの呼吸から來てゐる筈だ」と彼自ら語つているように、小說家になる前に彼が戲曲作家であつたということは、いろいろの意味で彼の小說に大きな影響を與えていたのである。出世作「夫婦善哉」により一躍花形となつて以後は、彼は戲曲を書くことをやめて專ら小說ばかり書いていた。しかし後年自ら語るところによつても、それまで八年間といふもの、彼は一篇の小說をも書かず、ただ只管戲曲ばかりを勉强していたようである。それはまことに勉强という言葉に相應しい精魂を傾けた打ち込み方であつたようである。四篇の戲曲のほかに彼はいくつかの戲曲論をも書いている。彼は他人の小說はあまり讀まなかつたが、しかし戲曲はあらゆるものを讀んで熱心に研究していたようである。八年間といえば短かつた彼の作家生涯の正に最大部分を占めるものである。小說家となつて以後死に至るまでの數年間、彼はその病軀を酷使しつつ驚くべき多量の作品を書き殘したが、しかしそれが單なる書き殴りでなく、八年間の勉强の結實であつたことをひと

11578

は理解すべきであろう。死ぬ前に彼は「わが文學修業はこれからである。……そのうち戯曲も書かうと思ふ。最近、友人が『君は本職をもう捨てたのか』といつた。小説は私の副職だといふのである。『いや今に戯曲を書くよ』と答へた。……いろいろ樂みで、なかなか死ねないと思う。」と語つているところによつても、彼が戯曲というものに可成りの未練をもち野望をもつていたことが窺われる。

「朝」は織田氏自身のいわゆる三高五年生、即ち落第した二度目の三年生のとき、三高文藝部の機關雜誌「嶽水會雜誌」に掲載せられたものである。彼の遺した四つの戯曲のうち最も卓れたものである。一高校生がすでにかくのごとき職業的に完成された作品を書いていたということだけでも驚くべきことである。しかし本文庫にこれを收めたのは、單に若くして死んだ人氣作家の未だ世に知られざる處女作というような、骨董的な興味からだけではない。ここに現れた制作傾向は、後年彼が作家として世の様々なる毀譽褒貶を一身に浴びながら書き殴つた頃の多くの作品とは、可成り傾向の違つたものである。作家織田作之助を理解するためには、是非とも認識せらるべき一面であろう。そのいずれが本當かというようなことも、そう簡單には論斷しえないものがあるように思われる。織田氏逝きて既に二年、單なる好悪から出た毀譽褒貶のほかに、そろそろ客觀性をもつた行き屆いた認識と公正な評價とが出て來てもよいのではないだろうか。

アテネ文庫

1 茶の精神　久松眞一
2 河上肇博士のこと　藤岳文章
3 美しき魂　深田康算
4 わが父西田幾多郎　西田靜子・上田彌生
5 花と死と運命　木村素衛
6 抱樽酒話　青木正兒
7 實存哲學　高坂正顯
8 きりしたん大名　ラウレス　織田作之助
9 朝
10 科學以前　下村寅太郎
11 社會主義神髓　幸德秋水
12 終戰覺書　高木惣吉
13 歩いてきた道　山本安英
14 野の百合・空の鳥　キエルケゴール　久山康譯
15 私の伊豆　川端康成

續刊

翁　夜話　尾崎行雄
卒　ダ・ダ・レナ　池谷信三郎
マグ　井荷風　岡崎義惠
永　童笛を吹けども　室生犀星
キリスト教と近代文化　ローゲンドルフ
隨　想　天野貞祐
私の行き方　小林一三
ドストイエフスキーと宗教　西谷啓治
隨　想　岸田國士
ケ！ベル博士　和辻哲郎
創　作　豐島與志雄
創　作　平林たい子
フランス通信　桑原武夫
創　作　壺井榮
上海三十年　小竹文夫
日本の財閥　土屋喬雄
隨　想　鈴木大拙

著者　織田作之助

弘堂印

¥ 15,00

發行所　弘文堂書房
東京・神田・駿河臺
A一一二〇二八

昭和二三年三月一五日印刷
昭和二三年三月二五日發行

發行者　八坂淺太郎
印刷者　中内佐光

アテネ文庫刊行のことば

昔、アテネは方一里にみたない小國であつた。しかもその中にプラトン、アリストテレスの哲學を生み、フィヂアス、プラクシテレスの藝術を、またソフォクレス、ユウリピデスの悲劇を生んで、人類文化永遠の礎石を置いた。明日の日本もまた、たとい小さく且つ貧しくとも、高き藝術と深き學問とをもつて世界に誇る國たらしめねばならぬ。「暮しは低く思いは高く」のワーヅワースの詩句のごとく、最低の生活の中にも最高の精神が宿されていなければならぬ。本文庫もまたかかる日本に相應しく、最も簡素なる小册の中に最も豐かなる生命を充溢せしめんことを念願するものである。切り取られて花瓶にさされた一輪の花が樹上に群る花よりも美しいごとく。また彫刻におけるトルソーが、全身において見出されえない肢節のみのもつ部分美を顯現するごとく。

終